

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	初春の詞：文苑
Author(s)	そまを
Citation	龍南會雜誌， 7 7： 9 2 - 9 5
Issue date	1900-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5494
Right	

ボ一の死の晩かりしを悲まむ。

此の世の花は常にもろくして、詩人の涙は已に涸れぬ。聖者静けき窓の戸に、無象の天を伺ふとき、悪魔はこゑあげて『死』と叫べり。あゝ、瀬川は遠し、汨羅は水濁れり。首陽の蘇徒に長くして、折る人なきを恨む。せめては匂ふこひの花、こも亦果敢なき露の間の命にあらすや。

われはこの世に就て、あまりねはくの望ど、願どを有せず。われは吾が理想に描ける、一種の樂園に遊びて、此の世の不平と憤悶とを慰めん。此の世の美酒は濁れり。かしこの美酒は澄めり。あゝ吾が理想の樂園よ、其所に美まき花あり、清き月影あり、あいらしき小蘆花あり、やさしき姫百合あり。れもへ、その花影に慰めり、その月影に光りあり、その小蘆花に涙あり、その姫百合に香あり。われはこの花かげに眠り、この月影に臥し、この小蘆花に同情の涙を蹠ぎ、この姫百合に天國の香をかぎ、清く、尊き、一生を送らんとす。あゝ吾が理想の天國の、其所にアボンの流あり、エデンの花園あり。此の流れに美まき月輝けり。月影に乙女眠れり。眠れる乙女に、清き愛あり。われは、この清き愛を渴望ま、美しきこひを想理す。

われは祈る神よ、願くはこの花園をまて、長へに美しからえめよ。この小川をして、長へに清からえめよ。この乙女をまて、長へに氣高からしめよ。

初春の詞

久かたのはてなき空にあさ霞たなひきわたり春たつらえも
 げに、いつまかも春來たるらし。高根のみ雪かつ消えて、いと寒けなりま冬空は、い
 つまかのどかなる初春の色とかはりはてつ。うら／＼とたちこむる霞に、打はたす
 野も山も、おぼるに打ち煙りて、まだ若やげなる柳の枝に、よべ春雨の訪れまあした、
 またも吹く風に誘はれて玉なす雪をはら／＼とこぼせる、えもいはす哀れなり。軒
 端の梅は半ば散りすきたれど、桃李の蕾はまさに結びむと、岡の邊の櫻も皇靈祭
 頃にはなど、人々のの／＼じりさわぐに、わが心もいとうきたちて、逍遙に家路を忘る
 ゝことしば／＼なるも、げに春の賜なりや。

『梓月はるとはいへど大方の』

人のこゝろはゆるみこそすれ』

野邊にたゝずめば、優えき若草のひそかに頭をもたぐるあり。山まゆのみどりをつ
 つす水の邊りをさまよへば、さ／＼と小砂利洗ひゆく流の音にも、げに初春の歌
 の響はこもるめり。朝は、明星の光薄らぎゆく曙の空より、夕は入相の鐘のゆる／＼
 と花間を渡りくる黄昏時にいたるまで、目に映るものは若やかにたのまげなる色
 を見せ、耳に入るものはいみじくもやさえき響を傳ふるかな。谷間を出る鳥の聲、
 雷を破る風のさやぎ、いづれか初春の歌ならぬ。雨ごとに青みゆく山の色、野の光、いづ
 れか初春の彩ならぬ。あゝこの歌よ、この彩よ、なぞてかくは人の心を和らけ樂ま

まひることのいみじきにや。眞淵が

とま月のくれぬと何にををしみけん春にまなれば春ぞたのしき

とよみいでけんこそげにさるものなれ。頭には霜を戴き腰は梓の弓を張り、半ば世を忘れ世に忘られむとせる老人も、此うらゝかなる色を見ては、ありし昔の面影を偲び世をすて俗を憤るからに、里を出でゝ山に入り、人を離れて自然を友とせる失意厭世の人も、此たのしき歌を聞きては、そゝろに浮世戀しく思ふらめ。まゑて全身希望に満てる青春の少年少女がたのまみよろこびぞもいかばかりぞや。彼等が夜半の夢路に通ふものは、秋落葉の音にはあらで、咲きも残らず散りも初めぬ彌生の花の姿なり。現に畫かく幻影は、しづ心なき落花の無情にあらすまて、春雨ごとに深みゆく青葉の山のまげみなり。げに彼等は希望に酔うて失敗を覺らず、樂まき色を見て悲しき聲を聞かず、はたかゝやける光明を見て沈める暗黒を見ざるなり。何ぞ知らむ、風樹頭に訪づれて落花地に委する恨みと、霜、楓林に凝りて黄葉風雨に散る恨みとを。されど人よ、希ふらくは彼等をまて其樂しみを盡さまめよ。其喜びを極めしめよ。喜びは彼等の血なれはなり。樂みは彼等の命なれはなり。喜びの在る處、樂しみの存する處、これ希望の抱かるゝ懷なり。希望ある處、志あり、志ある處、必ず道あり、かの運命をまたいかにせんや。

春こそは年のうなる兒うなるこそ

わが世の春の花の蕾よ

あはれ、初春の彩は喜びの色なり。初春の歌は希望の歌なり。人これを見て色笑まざるものなく、これを聞きて心昂らざるものなし。たのしき哉。

星と乙女

夢園

夕風やみて星出でぬ、
あれし海さへ和どりきぬ
平和の神のえろえりす
夕の國は来るなり
勞れ戦ひ、わづらひの
苦えみもいま忘れられて、

* * *
漁火の影三ツ二ツ

沖の浪間にまゝたくは
かしづく夜のあるならん
はぐゝむ妻子のあるならん
今かかへるとまづらんを

さい波よする磯の邊に
星の光に照らされて

立てる海士屋の窓暗く
さすや光は二分心の
心細くは見ゆれども
浮世のあらえはふきも來ず

* * *

漁士が娘か只二人
姉と妹かむつまじく
ひるのつかれを語りあひ
えましげに見る其のまみに
みそらの星は仰がれつ
あゝなづかえき新星の
影に二人は磯づたひ
たどるどしもはあらねども
いつぞか來ぬる丘の上